

“自分だけの本棚”をつくらう

山路敦史（武蔵野大学文学部日本文学文化学科）

I リンクする本たち

【1】平野啓一郎『本の読み方——スロー・リーディングの実践』（二〇〇六年、PHP研究所）、引用はPHP文庫版（二〇一九年）

私が読書にのめり込むようになったきっかけは、一四歳のときに読んだ三島由紀夫の『金閣寺』だった。それは、今にして思えば、ほとんど「なんだこりや？」的な衝撃で、どこまで内容が理解できたかも怪しいものだったが、しかし、だからこそ、私はひどく興味をそそられたのだと思う。[…]

『金閣寺』ショックのあと、私はしばらく、三島の本ばかりを読みあさり、気がつけばすっかりファンになっていた。そのうちに、今度は、彼が小説やエッセイの中で言及しているいろいろな作家のことが気になり始めた。たとえば、彼がトーマス・マンが好きだと言う。それじゃあ、マンを読んでみようと思う。マンを読むと、今度はゲーテの話が出てくる。それで、次はゲーテ。すると今度は、シラーが出てくる。それじゃあシラー……と、その連鎖は続いていく。また、三島が別のところでドストエフスキーについて何か書いている。ドストエフスキーを読むと、次はゴーゴリ……等々。三島はその意味で、まさしく私にとって読書の道順を示してくれた「保護者」だった。そして、三島が影響を受けた様々な作家の小説を読んだあと、もう一度、『金閣寺』をはじめとする彼の作品を読み返すと、最初に読んだときよりも、はるかによく、その内容が分かるようになっていて、私はひどくうれしかった。

そのうちに、三島を通じて出会った別の作家のほうにむしろのめり込むようになっていたりして、今度は自分の読書の偏りを自覚し、それを矯正するような本選びを心がけるようになった。

そうしたことを通じて、私は読書の喜びを知り、自分の好き嫌いを知った、しかし、それ以上に学んだことは、ある作家のある一つの作品の背後には、さらに途方もなく広大な言葉の世界が広がっているという事実である。どの一つの連鎖が欠落しているも、その作品は生まれてこなかったかもしれないという事実である。言葉というものは、地球規模の非常に大きな知の球体であり、そのほんの小さな一点に光を当てたものが一冊の本という存在ではないかと思う。一つの作品を支えているのは、それまで

の文学や哲学、宗教、歴史などの膨大な言葉の積み重ねである。そう考えるとき、私たちは、本を「先へ」と早足で読み進めていくというのではなく、「奥へ」とより深く読み込んでいくというふうな発想を転換できるのではないだろうか？

(83 ～ 86 ページ)

【2】『三浦しをん』舟を編む』(二〇一一年、光文社)

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」

魂の根幹を吐露する思いで、荒木は告げた。「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める。もっともふさわしい言葉で、正確に、思いを誰かに届けるために。もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠とした大海原をまえにたたくむほかないだろう」

「海を渡るにふさわしい舟を編む」

(27 ページ)

【3】『森見登美彦』夜は短し歩けよ乙女』(二〇〇六年、角川書店)

「あんたがさつき見てた本たちだって、そうだな。つなげてみようか」
「やってみろ」

「最初にあんたはシャーロック・ホームズ全集を見つけた。著者のコナン・ドイルはSFと言うべき『失われた世界』を書いたが、それはフランスの作家ジュール・ヴェルヌの影響を受けたからだ。そのヴェルヌが『アドリア海の復讐』を書いたのは、アレクサンドル・デュマを尊敬していたからだ。そしてデュマの『モンテ・クリスト伯』を日本で翻案したのが、「萬朝報」を主宰した黒岩涙香。彼は「明治バベルの塔」という小説に作中人物として登場する。その小説の作者山田風太郎が『戦中派闇市日記』の中で、ただ一言「愚作」と述べて、斬って捨てた小説が「鬼火」という小説で、それを書いたのが横溝正史。彼は若き日「新青年」という雑誌の編集長だったが、彼と腕を組んで「新青年」の編集にたずさわった編集者が、『アンドロギヌス』の渡辺温。彼は仕事で訪れた神戸で、乗っていた自転車が電車と衝突して死を遂げる。その死を「春寒」という文章を書いて追悼したのが、渡辺から原稿を依頼されていた谷崎潤一郎。その谷崎を雑誌上で批判して、文学上の論争を展開したのが芥川龍之介だが、芥川は論争の数カ月後に自殺を遂げる。その自殺前後の様子を踏まえて書かれたのが、内田百閒の『山高帽子』で、そういった百閒の文章を賞賛したのが三島由紀夫。三島が二十二歳の時に会って、『僕はあなたが嫌いだ』と面と向かって言つてのけた相手が太宰治。太宰は自殺する一年前、一人の男のために追悼文を書き、『君は、よくやった』と述べた。太宰にそう言われた男は結核で死んだ織田作之助だ。そら、彼の全集をあそこで読んでいる人がある」

(105 ～ 106 ページ)

II 宮崎駿は『草枕』をどう読んだのか？

【4】半藤一利・宮崎駿『半藤一利と宮崎駿の腰ぬけ愛国談義』(二〇一三年、文春ジブリ文庫)

宮崎 ええ、ほんとに。いずれにしましてもぼく、『草枕』が大好きで、飛行機に乗らなきゃいけないときは必ずあれを持っていくんです。どこからでも読める場所も好きなんです。終わりまで行ったら、また適当なところを開いて読んでりゃいい。ぼくはほんとうに、『草枕』ばかり読んでいる人間かもしれません(笑) (16ページ)

【5】夏目漱石『草枕』(『新小説』一九〇六年九月)、引用は新潮文庫版(二〇〇二年改版)

① 汽車程二十世紀の文明を代表するものはあるまい。何百と云う人間を同じ箱へ詰め轟と通る。情け容赦はない。詰め込まれた人間は皆同程度の速力で、同一の停車場へとまつてそうして、同様に蒸気の恩沢を浴さねばならぬ。人は汽車へ乗ると云う。余は積み込まれると云う。人は汽車で行くと云う。余は運搬されると云う。汽車程個性を軽蔑したものはない。文明はあらゆる限りの手段をつくして、個性を発達せしめたる後、あらゆる限りの方法によってこの個性を踏み付け様とする。

(174ページ～175ページ)

② 個人の嗜好はどうする事も出来ん。然し日本の山水を描くのが主意であるならば、吾々も亦日本固有の空気と色を出さねばならん。いくら仏蘭西の絵がうまいと云つて、その色をそのままに写して、これが日本の景色だとは云われない。(152ページ)

【6】夏目漱石『余が『草枕』』(『文章世界』一九〇六年一月)、引用は『定本漱石全集』第二五卷(二〇一八年、岩波書店)

① 私の『草枕』は、この世間普通にいふ小説とは全く反対の意味で書いたのである。唯だ一種の感じ——美しい感じが読者の頭に残りさへすればよい。それ以外に何も特別な目的があるのではない。さればこそ、プロットも無ければ、事件の発展もない。(230ページ)

② だから、事件の発展のみを小説と思う者には、『草枕』は分らんかも知れぬ。面白くないかも知れぬ。けれども、それは構ったことではない。私は唯、読者の頭に、美しく残りが残りさへすれば、それで満足なので、もし『草枕』が、この美しい感じを全く読者に与え得ないとすれば、即ち失敗の作、多少なりとも与へられるとすれば、即ち多少の成功をしたのである。(230～231ページ)

【7】漱石「草枕」

「西洋の本ですか、難しい事が書いてあるでしょうね」

「なあに」

「じゃ何が書いてあるんです」

「そうですね。実はわたしにもよく分からないんです」

「ホホホホ。それで御勉強なの」

「勉強じゃありません。只机の上へ、こう開けて、開いた所をいい加減に読んでるんです」

「それで面白いんですか」

「それが面白いんです」

「何故？」

「何故って、小説なんか、そうして読む方が面白いです」

「余つ程変って入らっしゃるのね」

「ええ、些と変ってます」

「初から読んじや、どうして悪るいでしよう」

「初から読まなけりやならないとすると、仕舞まで読まなけりやならない訳になりましょう」

「妙な理屈だ事。仕舞まで読んだっていいじゃありませんか」

「無論わるくは、ありませんよ。筋を読む気なら、わたしだって、そうします」

「筋を読まなけりや何を読むんです。筋の外に何か読むものがありますか」

(112 ～ 113 ページ)

【8】跡上史郎「宮崎駿と夏目漱石(下)」(『熊本大学教育学部紀要』第六九号、二〇一〇年一二月)

先に見た半藤一利との対談で宮崎駿は、「どこからでも読めるところが好きなんです」と言っていたが、これは、「草枕」九における画工と那美のやりとり「只机の上へ、かう開けて開いたところをいゝ加減に読んでるんです」を踏まえた、実に「草枕」に忠実な読み方と言えるだろう。

画工が読んでいるのは、筋のある西洋小説であり、彼はそれに逆らって筋を寸断するような読み方をしている。漱石自身による自作解説を信用するならば、「草枕」はそのような意志的努力をしなくても、最初から筋がない小説ということになっている。

Ⅲ 散歩文学としての草枕

【9】小川洋子「散歩ばかりしている」(『』)とにかく散歩いたしましよっ(『二〇二二年、毎日新聞社』)、引用は文春文庫版(二〇一五年)

夏目漱石の『こころ』が話題に上った時、一世代下の若い友人が、「ああ、あの散歩ばかりしている小説ね」と見事に一言で言い切った。

確かに登場人物たちはしよっちゅう街を歩いている。歩きながら、考えたり喋ったりしている。先生が苦悩の一端を語り手の「私」に垣間見せるのも散歩の途中であったし、一人の女性を巡って先生と親友Kの関係が抜き差しならない状態に陥っていくのもまた、長い散歩の最中だった。『こころ』の中で、大事なことは全部、散歩を通して浮かび上がってくる。

もし、散歩文学というジャンルがあるなら、『こころ』はその筆頭に挙げられるべきだろう。ほかに、梶井基次郎の『檸檬』、ヘッセの『車輪の下』、ツルゲーネフの『はつ恋』なども入りたい。武田泰淳にはずばり、名著『目まいのする散歩』がある。『ノルウェイの森』で主人公と直子さんが体を寄せ合って散歩する、ただそれだけのデートを繰り返す場面も忘れがたい。

こんなふうに並べてみると、散歩文学にはあまり威勢のいい作品は似合わないようだ。(30～31ページ)

【10】萩原朔太郎「猫町」(『セルパン』第五四号、一九三五年八月)、引用は『萩原

朔太郎全集』第五卷(補訂版)(一九八七年、筑摩書房)

私は医師の指定してくれた注意によつて、毎日家から四、五十町(三十分から一時間位)の附近を散歩してゐた。その日もやはり何時も通りに、ふだんの散歩区域を歩いて居た。私の通る道筋は、いつも同じやうに決まつて居た。だが、その日に限つて、ふと知らない横丁を通り抜けた。そしてすつかり道をまちがへ、方角を解らなくなつてしまつた。(350ページ)

【11】国木田独歩「武蔵野」(原題「今の武蔵野」、『国民之友』一八九八年一～二月)、引用は『定本国木田独歩全集』増訂版第二卷(一九七八年、学習研究社)

武蔵野に散歩する人は、道に迷ふことを苦にしてはならない。どの路でも足の向く方へゆけば必ず其処に見るべく、聞くべく、感ずべき獲物がある。(75ページ)

【12】漱石「草枕」

① 路は幾筋もあるが、合うては別れ、別れては合うから、どれが本筋とも認められぬ。どれも路である代りに、どれも路でない。草のなかに、黒赤い地が、見えたり隠れたりして、どの筋につながるか見分のつかぬ所に変化があつて面白い。 (157ページ)

② 男は岨道を下りるかと思いの外、曲り角から又引き返した。もと来た路へ姿を隠すかと思うと、そうでもない。又あるき直してくる。この草原を、散歩する人の外に、こんなに行きつ戻りつするものはない筈だ。然しあれが散歩の姿であろうか。又あんな男がこの近辺に住んでいるとも考えられない。男は時々立ち留る。首を傾げる。又は四方を見廻す。大に考え込む様にもある。人を待ち合わせる風にも取られる。何だかわからない。

余はこの物騒な男から、ついに吾眼をはなす事が出来なかった。別に恐ろしいでもない、又画にしようと言ふ気も出ない。只眼をはなす事が出来なかった。

(160～161ページ)

【13】佐藤友哉『1000の小説とバックアード』(二〇〇七年、新潮社)

僕は本を読む人間なら誰もがするように、本棚につめこまれた書物のタイトルを確認した。

『虹いくたび』『つめたいよるに』『仰臥漫録』『第四間氷期』『ある微笑』『ムーミン谷の仲間たち』『迷路のなかで』『ラベンダー・ドラゴン』『森の死神』『魚雷艇学生』『絵のない絵本』『樽』『鳥の影』『愛の生活』『花のノートルダム』『エドウィン・マールハウス』『みずうみ』『猫のゆりかご』『思い出トランプ』『宮殿泥棒』『野火』『ブルーン神父の童心』『夏への扉』『王妃の離婚』『八月の光』『ころ』『地下室の手記』『かもめのジョナサン』『挟み撃ち』『腕くらべ』『白鯨』『王道』『まだ人間じゃない』『偉大なる王』『クローディアの秘密』『死刑囚最後の日』『しろばんば』『ペスト』『陛下』『女王蜂』『松ヶ枝町サーガ』『むずかしい愛』『核パニックの五日間』『さよならの城』『草の花』『神曲崩壊』『野獣死すべし』『女の勲章』『クージョ』『素顔』『あじさいの歌』『復活』『迷宮の神』『二万時間の男』『イカルス失墜』『異端教祖株式会社』『哀しい予感』『軽井沢夫人』『パットお嬢さん』『アクロイド殺し』『アキレスと亀』『六道遊行』『黄色い部屋の謎』『血の収穫』『金色夜叉』『五分後の世界』『ライオン』『色ざんげ』『高い城の男』『瘋癲老人日記』『ブンとフィン』『海と毒薬』『女王の復活』『雨を売る男』『戦争はなかった』『チャンピオンたちの朝食』『神と野獣の日』『天使も踏むを恐れるところ』『武蔵野』『近代能楽集』『不死の人』『抱擁家族』『オートバイ』『これいただくわ』『巨門星』『私はいつも私』『ゴルフファーは眠れない』『尋問』『ワインズバーグ・オハイオ』『不思議図書館』『青い月曜日』『さよなら快傑黒頭巾』『あらくれ』『三十九階段』『戦艦武蔵』『石つぶて』『悪夢狩り』『永遠の都』『エーミールと探偵たち』『ひそやかな村』『旅券のない犬』『驚異物語』……ざつと

百冊ほど確認してみたが、ものすごくまとまりが悪かった。ジャンルはばらばらで、文庫と単行本が一緒くたにされている。

それは虐待だ。
それは犯罪だ。

僕は『まとまりの悪い本棚を見ると直したくなる病』なのだが、さすがに面接先だし、この量の本を一人で直すのは不可能なので、結び慣れていないネクタイを調節しながら待っていると、本棚の一つが震えはじめた。

(9～11ページ)

IV 終わりに、価値を知り、価値を創造しよう

【14】角田光代「旅する本」(『この本が、世界に存在すること』二〇〇五年、メディアファクトリー)、引用は『さがしもの』(二〇〇八年、新潮文庫)

そして私をじろりとらみ、「あんたこれ売っちゃうの？」と訊いた。

意味がよくわからなかった。今は亡き作家の初版本でもないし、絶版になった本でもない。大型書店にいけば手にはいるような、それは翻訳小説だったのだ。

「え……価値があるんですか」

私は訊いた。その質問が、店の主人には気に入らなかったらしく、彼は大げさに首をふって私を見据え、

「あんたね、価値があるかどうかなんてのは、人に訊くことじゃないよ。自分で決めることだろう」と言う。

(11～12ページ)